

マルクスの経済学における基礎視角の検討

音 無 通 宏

まえがき

マルクスにとっての究極の理論的実践的課題は、歴史の創造主体としての人間の把握であり、その普遍的解放を実現することであった。そして、この課題を歴史の基礎過程の分析を通して解明しようとしたのが、マルクスの経済学であった。

周知のようにマルクスは、『経済学批判』序言において自からの経済学形成の歩みをのべているが、彼は経済学の形成を通して歴史の経済学的把握をなしとげるとともに、人間の歴史形成という問題を経済学において明らかにしようとしたのである。いいかえれば、マルクスは歴史を再生産過程として把握するとともに、この再生産過程の繰り返しのなかで人間の歴史形成が進むことを明らかにしようとしたのである。

マルクスによれば、資本制的再生産過程の拡大された規模での反復が、資本家的私的所有の揚棄を必然のものとすると考えられていた。

周知のように、『資本論』の分析対象はイギリスにおかれているが、それはマルクスが、イギリス資本主義のもつ人類史上での意義をきわめて重視していたからである。

彼は、イギリスでは、小商品生産にもとづく私的所有がことごとく資本家的私的所有へと転化しているものとみなしていた。だから、彼は、そのイギリスで資本家的私的所有が揚棄されることは、普遍の人間解放への不可欠の条件たる私的所有の全般的揚棄の実現を意味すると考えていたのである。

その意味で『資本論』は、初期以来のマルクスの思想すなわち「私的所有の揚棄としてのコムニズム」を、資本家的私的所有揚棄の必然性の理論展開において結実させたものであるということが出来る。

本稿ではまず、マルクスが、経済学の形成過程において獲得するとともに、『資本論』体系をも貫ぬいている基礎的な視角を検討し、次いで、そうした視角を基底にすることによって経済学的な解明が果された資本家的私的所有揚棄の必然性を『資本論』がどのように明らかにしているかをみることにしよう。⁽¹⁾

(1) 本稿は当初、人間の歴史形成という問題を、マルクス再生産論における経済法則と人間の行為連関において明らかにすることを意図したものであった。またマルクス研究における筆者の基本的態度は、『資本論』等の完成した著作からだけでなく、その形成過程に即してみるところにあるが、このような大きな課題に対して本稿での考察は、『経済学・哲学手稿』『ドイツ・イデオロギー』および『資本論』に限られており、なお著るしく不十分なものであることをあらかじめおことわりしておかねばならない。

I 経済学と歴史

(1) マルクスが歴史の経済学的把握をめぐって決定的な飛躍をなしとげたのは、その思想形成期にエンゲルスと共同で執筆した『ドイツ・イデオロギー』(1845~46年)においてであった。マルクスにおけるこの飛躍は、彼が「古い唯物論⁽²⁾」とよんで批判したドイツ観念論とくにフョイエルバッハの克服と結びついていたのであるが、その克服に際しての核心的課題ともいうべきものが、人間把握の問題であった。実在的な真の歴史したがってまた社会を把握しうるかどうかは、この人間把握のしかたいかんにかかっていたからである。

そこでまず、この人間把握の問題からみていくことにしよう。

マルクスが「古い唯物論」的立場と自からの立場との相違を要約的にのべたのは、『フョイエルバッハにかんするテーゼ』なる短いメモにおいてである。マルクスはこの中で、フョイエルバッハが人間を「実践」において把握しないことを批判しつつ、次のようにのべている。すなわち、人間はただ環境によって規定されるだけではなく「環境が人間によって変えられなければならない」と。あるいは「環境の変更と人間活動または自己変革との一致はただ革命的のみにとらえられうるし、合理的に理解される」と(第3テーゼ)。このようにマルクスは、人間を「実践」において把握することの重要性を強調しているのであるが、事実、観想的かつ静態的にしか人間を把握しないフョイエルバッハは、必然的に「神秘主義」と「観念論」に陥入らざるをえなかったのであり、また現実に対する「合理的理解」には到達しえなかったのである。「神秘主義」と「観念論」⁽³⁾との克服は、まさに人間を「実践」において把握するところにはじまるというべきであった。

さらにフョイエルバッハ批判を完遂した『ドイツ・イデオロギー』において、マルクスは次のようにのべている。すなわち「フョイエルバッハは『現実的な歴史的人間』⁽⁴⁾のかわりに、『人間というもの』について語る」と。あるいはまた「(フョイエルバッハは——引用者)人間を所与の社会的な関連においてみようとせず、かれらをいまある姿のその当人に仕上げた、かれらのありのままの生活条件のうちでつかもうとはしないので、かれは決して現実的に存在している、行動している人間にまでは到達せず、かえって『人間というもの』という抽象物にいつまでもとどまって、やっと感じにおいてだけ『現実的、個人的、肉体をそなえた人間』を認めるところまできているにすぎない。……現実の生活諸関

(2) K. Marx, Thesen über Feuerbach, *Marx-Engels Werke*, Bd. 3, Berlin 1958, S. 5. 『マルクス・エンゲルス全集』, 第3巻, 5頁。

(3) K. Marx, *Ebenda*. 第1および第8テーゼを見よ。

(4) マルクス, エンゲルス, 『(新版)ドイツ・イデオロギー』花崎泉平訳, 合同出版, 1966年, 48頁。本稿での考察はすべて『ドイツ・イデオロギー』の第1章に限定されているので、ゲ・ア・バガトウーリヤ編集の新版を用いることにする。

(5) 係の批判はなにもない」と。つまりマルクスは、フォイエルバッハが観想の領域にとどまっているかぎり、彼の「人間」は、一つの抽象物にすぎず歴史具体的な現実的諸前提をもっていないこと、従ってまたフォイエルバッハ的人間把握からは、具体的な歴史過程の認識も現実的諸関係に対する批判も生まれえないことを強調しているのである。そしてさらにいう。「まさに共産主義的唯物論者が、産業と社会的編成の変更の必然性と同時に条件とをみているところで、(彼は一引用者) 観念論へとたちもどらざるをえないのである。フォイエルバッハが唯物論者であるかぎり、歴史はかれのもとにはあらわれないし、かれが歴史に目を向けるかぎり、かれは唯物論者ではない」と。観想の領域にいるかぎり、フォイエルバッハは、実在的な人間の歴史をとらえることができなかつたのである。実在的な人間生活の歴史は、まさに人間を「実践」において、あるいは「実践」主体として把握することを通してとらえられえたのであった。

しかし、初期マルクスの人間把握にとってより大切なのは、この「実践」あるいは「実践」主体ということの内容である。それは、彼の歴史(=社会)把握のしかたを初発において規定するものとなっているからである。

この点でとくに重要な位置を占めるものが、マルクスの経済学形成過程における最初の草稿たる『経済学・哲学手稿』(1884年、以下『経哲手稿』と略す)であろう。

『経哲手稿』のマルクスは、人間の本質を労働において把握するとともに、他の類から区別される人間の類的特質をその労働の目的意識的性格にもとめていた。いいかえれば、労働が人間の「類的存在」を確認するものであり、しかもそれを目的意識的にこなうところに人間を他の動物から区別する特徴があることを強調していたのである。マルクスは次のようにのべている。すなわち「ある対象の世界を実践的に生み出すこと、非有機的な自然に労働をくわえることは、人間が一つの意識的な類的存在としての実を示すことである」と。あるいはまた「動物はただ、その所属する種の尺度と要求にしたがってかたちづくりにすぎない。」「ところが人間は肉体的要求にせまられないでも生産するし、肉体的要求から自由なばあいにはじめて真実に生産する。」「動物はそれの生活活動と直接に一つである。……意識的な生活活動が人間を動物的生活活動から直接に区別する。まさしくこれによってのみ人間は一つの類的存在である」と。このように、人間の「実践」を労働すなわち目的意識的な生産活動においてとらえていたのが『経哲手稿』のマルクスであった。

(5) 同、52～53頁。

(6) 同、53頁。

(7) K. Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte*, (Philipp Reclam jun.), Leipzig, S. 156. 藤野渉訳『経済学・哲学手稿』, 国民文庫, 104頁。

(8) *Ebenda*, S. 157～158. 前掲邦訳 106～107頁。

従って、そこでの人間は、自然のうちに埋没している「自然存在」⁽⁹⁾でもなく、また逆に、直接にあるがままの姿での「人間的存在」⁽¹⁰⁾でもない。目的意識的な生産活動を通じて、対象の自然に働きかけ自然を「非有機的な身体」⁽¹¹⁾と化し、また同時に自分の内なる自然をも歴史的社会的に形成された「人間的自然」⁽¹²⁾へと変化させてきた、そういう人間であった。いいかえれば『経哲手稿』での人間は、目的意識的な生産活動＝労働を通して、絶えざる自己形成過程にあり、歴史的社会的に形成されつつある「存在」であった。

ここで留意しなければならないのは、このような人間把握のうちに、すでに一定の歴史把握が含まれているということである。マルクスはいう。世界史とは「人間的労働による人間の産出、人間にとっての自然の生成よりほかのなにものでもない」と。あるいはまた「全歴史は『人間』が感性的意識の対象となるための、そして『人間としての人間』の要求が〔自然的、感性的な〕要求となるための、準備および発展の歴史である。(だから一引用者)歴史そのものは、自然の人間への生成の、現実的な一部分である」⁽¹³⁾〔 ー原文のまま〕と。『経哲手稿』のマルクスにあっては、「歴史」とは、労働を通しての人間の自己形成過程、「自然史」的過程として自からを貫ぬくところの人間の自己形成過程のことであった。

ここでの歴史把握が、なお抽象的であることは、みられる通りである。だが目的意識的な生産活動＝労働において人間を把握するということは、現実の人間をとらえることであり人間の実在的な歴史過程をとらえることを意味していた——少なくともとらえうる方向性の確立を意味していたのである。人間を「実践」においてとらえるとともに、その「実践」概念を目的意識的な生産活動＝労働において把握することの決定的な重要性はここにあったのである。経済学研究の最初の草稿において、それまでの人間の自己疎外とその止揚という問題を、労働の疎外とその止揚の問題として把握するところに到達したマルクスは、これ以後、普遍的人間解放という課題を、歴史の基礎過程の分析を通して究明しようとする方向に向うのである。

ところで、ここに、目的意識的な生産活動＝労働において人間の歴史したがって社会をとらえるところに到達したということは、いいかえれば、人間と自然との物質代謝過程に視点において歴史と社会をみるということである。マルクスが『経哲手稿』の中でしばしばのべる人間の「類的生活」「類的活動」というのは、この人間と自然との物質代謝過程、社会的物質代謝過程のことである。このように、50年代以降のマルクスの理論基準をもっ

(9) *Ebenda*, S. 241, 前掲邦訳 224 頁。

(10) *Ebenda*, S. 241, 前掲邦訳 224 頁。

(11) *Ebenda*, S. 157, 前掲邦訳 105 頁。

(12) *Ebenda*, S. 237, 前掲邦訳 218 頁。

(13) *Ebenda*, S. 197, 前掲邦訳 161 頁。

(14) *Ebenda*, S. 194, 前掲邦訳 157～158 頁。

てすれば、『経哲手稿』時代のマルクスが獲得したものは、人間と自然との物質代謝過程に視点を置いて歴史と社会、また人間の歴史形成という問題を把握するという思想であった。⁽¹⁵⁾

この人間と自然との物質代謝過程という視角こそ「初期マルクスの思想の凝縮点」にはかならなかったのである。

かくして『経哲手稿』以後のマルクスは、人間と自然との物質代謝過程が、特定の社会形態のもとでどのように行なわれるかを見ることによって、その社会形態がもつ人類史上での位置を確定するとともに、その社会形態のもとで普遍の人間解放への人類の自己形成がどのように進むかを明らかにしていくことになる。

われわれは、後に『資本論』においてこのような視角が徹底して貫ぬかれているのを見るであろう。

(2) しかし、以上のようなきわめて重要な視角を形成したにもかかわらず、『経哲手稿』でのマルクスの人間＝歴史把握は、すでにみたようなお抽象的なものであった。経済学の成立へと向うためには、さらに歴史の具体的分析を要したのである。そしてそれを行なったのが、『経哲手稿』から1年余り後の『ドイツ・イデオロギー』であった。マルクスは、この著作を通して、ほぼ基本的に歴史の経済学的把握へと到達したのである。

マルクスの経済学が歴史科学であるといわれる根拠の一つは、彼の経済学が、歴史の経済学的把握と不可分のものとして形成されたところにあると思われるが、われわれはこの著作を通して、歴史と経済学をつなぐものが「再生産」の論理であることを知ることができるのである。以下においてこの点を検討しよう。

『ドイツ・イデオロギー』における人間は、『一定の物質的な……諸制限、諸前提、諸条件のもとで活動している……諸個人⁽¹⁶⁾」「現実的諸個人⁽¹⁷⁾』である。そして歴史は、分業＝所有諸形態のもとでの具体的歴史である。歴史の発展段階をあらわす分業と所有の諸形態は次の順序で進むものとされる。分業—— i) 分業の未成立（農業と商・工業の未分離）、ii) 都市と農村の分離・対立（農業からの商工業の分裂）、iii) マニュファクチュアの成立（工業からの商業の分離、都市間分業と産業部門間および部門内分業の成立）、iv) 「ひろがりつづいた分業」（＝大工業）。これらに対応する所有形態は、i) 部族所有、ii) 古代の共同体および国家所有、iii) 封建的あるいは身分的所有、iv) 近代的私的所有、である。

そしてこれらの発展段階からなる歴史過程は、次のように説明されている。

すなわちこれらの各段階にあって、現実の諸個人は、先行する世代から特定の物質的諸

(15) 内田義彦『資本論の世界』、岩波書店、1966年、116頁。以上のように、人間の歴史形成を生産＝生活活動における自的意識性との関連で把握しようとするところに、初期以来のマルクスの思想の特質があったことに注意しなければならない。

(16) マルクス、エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』、前掲邦訳、40頁。

(17) 同、29頁。

条件と生産諸力を、特定の対自然関係（生産手段と生産物に対する諸個人の関係）および諸個人相互の関係とともに受けとり、そのもとの生産活動を行なうことによって自からの生活を再生産すると同時にそれらの諸関係そのものをも再生産する。歴史とはまず何よりもこのような過程の連続である。

しかし、単なる連続なのではない。人間は、この再生産の過程において、たえず「新しい諸要求」⁽¹⁸⁾をうみだすのであるが、この「新しい諸要求」をテコとして「新しい生産力」⁽¹⁹⁾をうみ出す。そしてこの「新しい生産力」が「新しい分業」⁽²⁰⁾に結果する。かくして、総体としての生産諸力⇄分業連関⁽²⁰⁾が、この「新生産力→新分業」を内的起動力として拡大する。しかも累進的に拡大するのである。

このようにして形成される分業の発展段階に対応して「所有のさまざまな形態」があらわれるとともに、分業は、生産諸力⇄分業連関の累進的拡大の「一段階ごと」に、そこで農業、工業、商業等を現実的に営む諸個人相互間および彼らの生産手段、生産物に対する新たな関係を展開する⁽²¹⁾。

みられる通り、『ドイツ・イデオロギー』における分業=所有諸形態の分析は、歴史の各段階での社会的物質代謝の総体分析であり、再生産構造分析として行なわれているのである⁽²²⁾。

そしてこのような具体的分析のもとで、分業=所有形態の発展系列において把握されているのが、『ドイツ・イデオロギー』での歴史である。この著作におけるマルクスは、分業を歴史貫通的概念としつつ、所有形態は変化するものとして把握している。従って、ここでの歴史は連続と断絶を含んでいる。マルクスはいう。「歴史とは、個々の世代の連続的交代にはかならない。それらのどの世代も、それ以前の全世代が送った諸材料、諸資本、生産諸力を利用する。したがって各世代は、一面ではまったく変化した状況で、継続した活動を続行するのであり、他面ではまったく変化した活動によって、これまでのふるい状

(18) 同、56頁。

(19) 同、33頁。

(20) 同、33頁。

(21) 次の文を参照されたい。——「分業のさまざまな発展段階とは、まさに所有のさまざまな形態のことである。すなわち、分業はその一段階ごとに、労働の材料、道具、産物に対して諸個人が相互にとり結ぶ関係をも規定する。」(同、33頁。)

(22) 以上のような見方は、望月清司「『ドイツ・イデオロギー』における「分業」の論理」(『思想』、1968年第12号)に依っている。氏はこの論文において、『ドイツ・イデオロギー』の、マルクスによる部分とエンゲルスの筆になる部分を詳細に検討され、両者の思想の系譜の相違を分析しておられる。筆者もまた『ドイツ・イデオロギー』の文脈に不整合を感じてきたもの一人として、氏の分析に首肯しうところが少なくないのであるが、それを検討する余裕をもたないので、ここではとりあえず、この著作がマルクスとエンゲルスとの共同執筆であることを重視しておきたい。

況の姿を変更するのである⁽²³⁾と。

このような連続と断絶の双方を含んで歴史＝「再生産」、これがマルクス独自の歴史把握の方法である。マルクスはいう。「人間たちが歴史をもつのは、かれらの生活を再生産せねばならないから、しかも特定の仕方⁽²⁴⁾でせねばならないからである」(傍点＝原文のまま)と。

特定の仕方での生活の「再生産」＝歴史、すなわち歴史とは、「現実的諸個人」による日々のあるいは年々の「再生産」過程の反復と累積にはかならないのである。そして、この「再生産」過程を通して、新たな分業の発展段階＝所有形態が形成される。つまり、この「再生産」過程の反復と累積のなかで、新たな社会形態が形成されるのである。

『ドイツ・イデオロギー』のマルクスが、分業＝所有諸形態の分析を通して人間と自然との物質代謝過程の総体分析を行ない、しかもそれを「再生産」過程＝構造分析として行なったところに、『経哲手稿』からの決定的ともいいうる飛躍があったのである。従ってここここでは、人間の自己形成過程＝自然史的過程が、「再生産」過程＝構造分析を通して、はるかに具体的に把握されているのである。

『ドイツ・イデオロギー』で獲得された歴史の再生産過程把握(構造分析を含む)こそ、マルクスの経済学形成途上においてきわめて重要な位置を占めるものであるとともに、後の『資本論』段階においても、基底的な視角となっているものである。

マルクスの経済学において、このような「再生産」の論理こそ歴史と経済学を媒介するものにほかならなかったなのである。

(3) それでは次に、以上の(1)(2)で検討した基本的ともいいうる視角が、マルクスの経済学研究の集大成たる『資本論』において、どのように貫ぬかれているかをみることにしよう。

人間労働の特質をその自的意識性にもとめ、そしてこの労働による人間と自然との物質代謝過程に視点をおいて歴史と社会をみるというのが、マルクスにおける基本視角の一つであることは、すでにみたところである。

『資本論』において、このような視角が最もよく示されているのは、剰余価値論の諸編においてである。いうまでもなく、これらの諸編は資本制社会の全分析にとっても基底的位置を占めるものである。『資本論』第1巻第3編以下がそれに相当するわけであるが、その冒頭におかれているのが「労働過程」である。マルクスが、この中で「くも」や「蜜蜂」と対比しつつ人間労働の目的意識的性格を強調していることは周知のところである。そしてこの同じ箇所⁽²⁴⁾で次のようにものべている。すなわち「労働は、まず第一に人間と自然との間の一過程である」「人間は、この運動によって自分の外の自然に働きかけてそれを変

(23) マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』、前掲邦訳、74頁。

(24) 同、60頁。

化させ、そうすることによって同時に自分自身の自然を変化させる⁽²⁵⁾」と。これらは、『資本論』においても目的意識的な生産活動による人間と自然との物質代謝過程に視点を置いて資本制社会の分析を行ない人間の歴史形成を把握していくことを明らかにしたものにほかならない。さらに第4編「相対的剰余価値の生産」のところでは、資本制生産のもとでの労働過程が、分業・協業体制として営まれることをのべる。この第4編の主眼は、あくまでも第13章「機械と大工業」の分析におかれているのであり、第11章「協業」と第12章「分業とマニファクチュア」での分析は、そのための理論的準備をなすものである。このような視角と方法によって、資本制生産のもとでの機械制大工業が、人間と自然との物質代謝過程としてもつポジティブな面とネガティブな面が析出される。この機械制大工業が、資本制生産のもとでどのようなメカニズムによって拡大していくかの具体的分析は、後編の問題として残されるが、物質代謝過程視点が貫ぬかれることによって『資本論』全体が、歴史形成的役割をもつ機械制大工業の拡大過程との緊張関係において展開されることになるのである。

次にこのような「剰余価値の生産」編に対して、資本制生産過程の分析の総括編たる第7編「資本の蓄積過程」はどうであろうか。

マルクスは、この『資本論』第1巻最終編において、彼が歴史の経済学的把握を通して獲得した再生産過程分析視角を展開しているのである。

この第7編の分析視角について、内田義彦氏は、『資本論の世界』の中で次のようにのべておられる。すなわち「……さきに、『剰余価値の生産』のところで資本関係の存在を前提条件として、いかにして資本制生産が行なわれるかをみたマルクスは、こんどは、資本制生産過程の前提条件が、同じ資本制生産過程のなかで一生産過程の結果として一どのように再生産されるかをまず基礎的な問題として研究する。そして、その上で、その前提条件が再生産過程のくりかえしの中で、どう変質してくるかを研究する」「歴史の流れを、こういうふうに毎年毎年の再生産の問題に一度還元し、その上で、その再生産過程の累積として歴史の流れを研究する。これがマルクスの見方であります⁽²⁶⁾」(傍点—原文のまま)と。つまり、マルクスはこの第7編の分析を通して、さきに「剰余価値の生産」の諸編では前提されていた資本・賃労働関係が、資本制生産過程の中で、その過程の結果として、どのようにして再生産されるかをみる。そしてその再生産過程の反復と累積の中で、資本・賃労働関係がどのように変化してくるかを見るというのである。

このような分析視角こそ、すでにわれわれが前項(2)でみたように、『ドイツ・イデオロギ

(25) K. Marx, *Das Kapital*, Berlin 1953, Bd. 1, S. 185. 『資本論』(国民文庫版), 第2分冊, 60頁。

(26) 内田義彦, 前掲書, 173頁。

一』においてマルクスが獲得したものであるとともに、『資本論』において歴史と経済学を媒介するものである。

しかし、上のことは『資本論』第1巻第7編だけにあてはまるものではなく、『資本論』第2巻についても妥当するのである。いうまでもなく、資本制的再生産過程は「資本の生産過程」からだけでなく「資本の流過程」からもなりたっているのであって、『資本論』第2巻は、その資本制的再生産過程を後者の視点から分析したものである。特にその第3編「社会的総資本の再生産と流通」は、その標題にも示されている通り、流通が、社会的規模での資本の再生産、従って資本・賃労働関係の社会的規模での再生産をどのようにして可能ならしめるかを明らかにしたものである。『資本論』第2巻での分析は、第1巻での分析を含んでいるのであり、この意味で、それは第1巻での再生産過程分析視角を高次展開したものにはかならない。ここでの分析の中に、先に見た剰余価値論＝労働過程論という視角、物質代謝過程視点が貫ぬかれていることはいうまでもない。

かくして、マルクスにあっては資本制社会の歴史は、剰余価値生産過程＝労働過程という二者闘争的性格をそのうちにはらむところの、年々の再生産過程の累積として、したがって再びあともどりするこのできない矛盾の発展過程として把握される。そして、この過程で必然的に生み出されるものが株式会社にはかならないのである。周知のようにマルクスは、資本制社会の歴史上でこの株式会社のもつ意義をきわめて重視していた。マルクスにあっては、株式会社は、目的意識的な生産活動による人間と自然との物質代謝過程の社会的・共同的性格と、所有の私的性格との最も鋭い矛盾関係をあらわすものとしてとらえられていたのであり、彼は、株式会社をもって資本家的私的所有の社会的所有への「必然的な通過点⁽²⁷⁾」とみなしていた。前項(1)(2)で検討した視角をもってするとき、『資本論』での私的所有＝資本家的私的所有批判は、この株式会社論において頂点に達するというべきであろう。

II 私的所有＝資本家的私的所有批判としての『資本論』

(1) 以上のような視角からみるとき『資本論』体系は、資本家的私的所有揚棄の必然性を論証したのとしてあらわれるのであるが、その検討にはいる前に、『資本論』で前提されている社会がどのようなものであったかをみておくことにしよう。

マルクスは、『資本論』の随所で、生産者と生産手段の結合にもとづく独立自由な「小経営が、社会的生産と労働者自身の自由な個性との発展のために必要な一つの条件」であること、あるいはまた「イギリスのヨーマンリ、スウェーデンの農民身分、フランスや西

(27) K. Marx, *a. a. O.*, Bd. 3, S. 478. 前掲邦訳, 第10分冊182頁。

(28) *Ebenda*, Bd. 1, S. 801. 前掲邦訳, 第4分冊, 390頁。

ドイツの農民」のような、ヨーロッパの「封建的土地所有の解体」(傍点一引用者)過程で発生してきた「自営農民の自由な分割地所有」は「人格の独立性の発展のための基礎」(傍点一引用者)であること、⁽²⁹⁾を強調している。

さらにまた、『資本論』以外の他のところでも、⁽³⁰⁾「自己労働にもとづく私的所有」の「他人労働の領有にもとづく資本家私的所有」への「転化」を通して、「耕作者からの根底的な収奪」(傍点一引用者)、つまり生産者と生産手段の本源的な結合関係の解体が遂行されたのは「まだイギリスだけ」であることをのべている。ここで、生産者と生産手段の本源的な結合関係というのは、「共同体的所有」と「自己労働にもとづく私的所有」の二つの所有形態をさしているのであり、マルクスは、イギリスにおいてのみ、この双方が解体されていることをのべているのである。

これらのことからわかるように、マルクスは、イギリスではこの二つの所有形態が解体されていることをのべつつも、同時にそこでの独立自由な「小経営」や「分割地所有」のもつ歴史的意義を強調しているのである。つまり、マルクスは、イギリスにおいて「封建的土地所有」あるいは「共同体的所有」の解体のうえにひろまった独立小商品生産者層の人類史的意義を強調しているのである。この独立自営の小商品生産者とは、いうまでもなく狭隘な共同体的類縁関係からぬけでて人格的自立性を確立しえた人間類型である。

マルクスにあっては、イギリス資本主義は、このような人間類型を基礎として展開した資本主義であり、「自己労働にもとづく私的所有」をことごとく資本家的私的所有へと転化している資本主義であった。

『資本論』がイギリス資本主義を対象としていたことは周知のところである。マルクスは『資本論』において、上のような人間類型＝労働者を前提するとともに、「自己労働にもとづく私的所有」がことごとく資本家的私的所有に転化している社会を前提していたのである。このような社会では、資本家的私的所有が揚棄されれば、私的所有一般もまた揚棄されることは明らかなことである。私的所有一般の揚棄を通して実現される普遍の人間解放を自からの究極的な理論的実践的課題としたマルクスが、『資本論』⁽³¹⁾において資本家的私的所有揚棄の歴史的必然性を展開した根拠はここにあったのである。

(29) *Ebenda*, Bd. 3, S. 858. 前掲邦訳, 第11分冊, 316~317頁。

(30) K. Marx, *Karl Marx-Friedrich Engels: Werke*, Berlin 1962, Bd. 19, S. 114~117, S. 238~239.

(31) いうまでもなくマルクスは、単に資本家的私的所有だけでなく、プロレタリアートの立場から私的所有一般をも批判しているのである。資本・賃労働関係が、「自由・平等な」市民関係としてあらわれるところに「近代ブルジョア社会」の特質があるのであって、マルクスは『資本論』によって、後者のもとでいかにして前者が再生産されるかを明らかにすると同時に、また、このような虚偽の市民関係から生ずる私的所有者の意識をも批判しているのである。『資本論』の各所における『物神性』論は、転倒した世界を、その世界に住む人間の日常感覚と意識を含めて批判したものであった。

(2) それでは次に、『資本論』が資本家的私的所有揚棄の必然性をどのように展開しているかをみることにしよう。

すでにのべたように、あくまでも人間と自然との物質代謝過程に視点を置いて歴史＝社会をみるマルクスは、まず、労働過程の資本制的形態を分析する。労働過程の資本制的形態はなによりもまず、「協業」であり、資本家的経営体は、この「協業」を「基本形態」とする分業・協業体制として営まれる。そして資本家的経営体においては、「協業」そのものから生じる労働の社会的生産力は資本のものになると同時に、協業過程の全体的「意志」「指揮」「監督」の機能は、資本家の専有に属することになる。従って労働者が、かつて「独立の農民」や「手工業者」として小規模ながらも発揮しえた生産上での「知識」や「理解」や「意志」は、今や彼らが喪失するに比例して、資本の側に集積されるのである。

マルクスは、資本制的労働過程の特徴をまず以上のように分析する。

しかし注意されるべきは、マルクスがこれらのところでかつての自己の人間＝労働把握、つまり労働主体の能動的側面を述べていないということである。人間を実践主体すなわち目的意識的な労働主体として把握するところに、マルクスの人間＝労働把握の特徴があることは、すでにのべた通りである。それにもかかわらず、マルクスは、相対的剰余価値論の本来的分析対象である「機械と大工業」のところで、「ここでは労働者のことは問題にしない⁽³²⁾」とのべて労働主体の側の分析を捨象しているのである。

この点について、次の諸点が想起されるべきであろう。すなわち、『資本論』第1巻第13章「機械と大工業」の前に、すでに第5章第1節「労働過程」において、人間労働者の能動的本性と、その目的意識的性格を強調していたということ、さらに、すでにのべたように、『資本論』そのものが、独立自由な「小経営」や「分割地所有」を基礎として発展した資本主義社会、従って、人格的自立性を確立しえたところの人間類型＝労働者を前提としていたということ、がそれである。従って、マルクスは、機械制大工業の分析にさいしても、そのような労働主体を前提していたのである。これらのことは重要な意味をもっているのであって、資本家的経営体のもとで、個々の部分過程を担当する労働者もまた、たえず協業過程全体の目的を意識しつつ生産を行なおうとするものであることに注意しなければならない。こうした労働者の努力があつてこそ、資本制生産のもとでの機械制大工業は、高い生産力を発揮しうるといふべきであろう⁽³³⁾。

作業目的全体を意識し理解しようとする労働者の努力は、資本制生産の発展につれて強

(32) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. 1, S. 396. 前掲邦訳, 第3分冊, 113頁。

(33) これらについては、山内靖氏が『マルクス・エンゲルスの世界史像』(未来社, 1961年)において、すでに指摘しておられる(同書, 376~379頁)。

められざるを得ないのであるが、近代的大工業の本性そのものがまた「一つの社会的細部機能の担い手にすぎない部分個人の代りに、種々の社会的機能を自分の種々の活動様式としてかわるがわる行なうような全体的に発達した個人をもってくることを、一つの死活の問題にする⁽³⁴⁾」のである。

社会的労働過程全体を理解し、そこでの全体的作業目的を意識しつつ生産を行なおうとする労働者は、こうした資本制生産の必然的傾向つまり「全体的に発達した個人」の形成へと向う必然的傾向に促迫されて、労働者自からの欲求と相矛盾するにいたる生産の資本制的形態の否定へと進まざるをえない。

ところで、『資本論』において資本家的私的所有揚棄の必然性の理論展開をみるばあい、欠かしえない重要性をもっているのは、資本家的協業形態のもとで資本の専有に属する「指揮」や「監督」機能の「二重性」ということである。これらの機能は、労働過程が協業形態をとればいつでも生ずるものである。だが、資本制生産のもとでは、これらの機能は、同時に搾取の機能でもあるという二重性を有しているのである。

このような二重性をもった資本家の機能は、資本制的労働過程の大規模化につれて、ますますその規模を拡大し複雑になる。それとともに、資本家は、前者の機能すなわち協業的労働過程から生ずるかぎりでの機能を「ある特別な種類の賃金労働者⁽³⁵⁾」＝「管理者⁽³⁶⁾」にゆだねるようになる。この面での機能の「管理者」への委譲は、資本制的生産の累積的發展とともに進む。

マルクスにあっては、この「管理者」への委譲過程は、同時に資本所有の寄生化の発展過程でもあった。資本制生産の発展は、「競争」と「信用」を二大槓桿として進むのであるが、この信用関係に媒介されて進行するのが、一方における協業過程から生ずる限りでの機能の「管理者」への委譲過程であり、他方における資本所有の寄生化の過程なのである。信用制度の発展は、資本家の「貸付資本家」と「機能資本家」への分裂を生じさせる。この結果、前者が資本所有をあらわし、後者が資本の「非所有」をあらわすものとなる。前者には「利子」が、後者には「企業者利得」が帰属する。「利子」は資本所有の「果実」であり、「企業者利得」は、資本機能のそれである。このように資本の所有と機能が分離される。今や生産過程は、資本機能に属し、資本所有は、生産過程の外に出ることになるのである。⁽³⁷⁾

このような事態は、株式会社の成立とともに一層発展する。株式会社があらわすものは、

(34) K. Marx, *a. a. O.*, S. 513. 前掲邦訳, 第3分冊, 291—292頁。

(35) *Ebenda*, S. 348. 前掲邦訳, 第3分冊, 39頁。

(36) *Ebenda*, Bd. 3, S. 423. 前掲邦訳, 第10分冊, 90頁。

(37) このような事態は、資本が1人の資本家に属していたとしても生ずる。「彼の資本そのもの

一方では大規模な労働過程の創出であり、他方では資本所有の機能からのさらに発展した分離である。この傾向は、銀行その他の信用制度の発展に媒介されて、株式会社が大規模化するとともに強まり、その結果資本所有は、協業の生産過程にとって全く「無為な所有」となり強度の寄生的性格を帯びた存在となる。そればかりではない。「機能資本家」に属していた「指揮」や「監督」機能のうち、社会的労働過程から生ずるかぎりでの一切の機能は全て「単なる管理者」に移され、⁽³⁹⁾「機能資本家」も今やただ他人の所有に属する資本を用いて、⁽⁴⁰⁾搾取するにすぎない存在となる。

一方において、機械制大工業の大規模化につれて、労働者の中に強まる作業目的全体を意識した労働への努力と、大工業そのものの本性から生じてそうした労働者の努力を促進する「全面的に発達した人間」形成への必然的傾向。他方において、ますます寄生的性格を強める資本家階級——株式会社。

マルクスはいう。「このような、資本主義的生産の最高の発展の結果こそは、資本が生産者たちの所有に、といってももはや個々別々の生産者たちの私有としてのではなく、結合された生産者である彼らの所有としての、直接的社会的所有に、転化されるための必然的な通過点なのである」⁽⁴¹⁾と。

しかし、『資本論』におけるマルクスの資本家的私的所有批判は、以上につきるものではない。それはさらに土地の私的独占に対する批判によって完成されなければならないのである。

マルクスによれば、人類は、近代的土地所有のもとではじめて科学の意識的な応用と農業の合理的経営の可能性を獲得するとともにこの最も困難かつ遅れた分野において、結合労働による自然の支配を通じて新たな社会形成のための物質的条件を準備しようところに到達したのであった。しかし、資本制社会のもとでは、これらの可能性は、さまざまな障

が、……利子を生み出す資本所有すなわち生産過程のその資本と・過程進行中の資本として企業者利得をあげる生産過程のなかの資本とに分裂するのである。」(Ebenda, Bd, S. 410. 前掲邦訳, 第10分冊, 70頁。)

(38) Ebenda, S. 414. 前掲邦訳, 第10分冊, 79頁。

(39) Ebenda, S. 424. 前掲邦訳, 第10分冊, 91頁。

(40) 一般に株式企業——信用制度とともに発展する——は、機能としてのこの管理労働を、資本が自己資本であろうと借入資本であろうと、とにかく資本の所有からはますます分離してゆく傾向がある。……一方では、単なる資本所有者である貨幣資本家に機能資本家が相対し、信用の発展につれてこの貨幣資本そのものが社会的な性格をもつようになり、銀行に集積され、もはやその直接の所有者からではなく銀行から貸し出されるようになることによって、また、他方では、借入れであろうとその他の方法であろうとどんな権原によっても資本の所有者ではない単なる管理者が、機能資本家そのものに属するすべての現実の機能を行なうことによって、残るのはただ機能者だけになり、資本家はよけいな人物として生産過程から消えてしまうのである。(Ebenda, S. 423-424. 前掲邦訳, 第10分冊, 91頁傍点引用者。)

(41) Ebenda, S. 478. 前掲邦訳, 第10分冊, 182頁。

害をともなつてしか実現されえないのである。それは、一切が価値増殖を目的にして営まれるからだけでなく、土地の私的独占からくる決定的な障害がつけ加わるからである。「地主階級」は、土地の私的独占によって、借地資本家が資本制的生産の枠内で行なおうとする「合理的」農業経営を妨げるだけではない。土地所有をテコとして、資本家階級が搾取した総利潤から全ての「超過利潤」を地代（差額地代+絶対地代）として取得してしまうのである。そしてこの地代は、資本制社会の発展につれて、ますます「ふくれあがって行く⁽⁴²⁾」のである。従つて、このような土地所有の存在は、資本にとつても桎梏以外のなものでもないのである。「地主階級」による土地の私的独占は、はじめから生産過程の外にあって単に農業部面で寄生的であるだけでなく、資本制社会全体に対して寄生的存在なのである。それゆゑに「土地所有者は自分の土地所有はスコットランドにあるのにその生涯をコンスタンチノーブルで送ることができる⁽⁴³⁾」のである。

このような土地所有を廃絶すること、つまり土地の国有化は、ブルジョアの要求にはかならないのであるが、資本家的私的所有の否定への契機を宿すこの土地の国有化を資本家階級は実現しえない。マルクスによれば、土地の私的独占と資本家的私的所有という二重の抑圧のもとにあるプロレタリアートのみが、「資本主義時代の成果、すなわち協業と土地および労働そのものによって生産される生産手段の共同占有、を基礎⁽⁴⁴⁾」として、それらの二つの私的所有をともに揚棄するのである。

以上見てきたように『資本論』は、歴史の経済学的把握によって獲得された基底的ともいふ視角を貫ぬいて、きわめてはげしく資本家的私的所有を（「地主階級」による土地の私的独占とともに）批判し、その揚棄の歴史的必然性を明らかにしていたのである。

—むすびにかえて—

本稿は、マルクスの思想体系を全体としてとらえようとする作業の一環をなすとともに経済学においては、マルクス再生産論を（そこにおける法則と人間の行為連関をも含めて）理解するための試みの一部分でもあった。マルクスが自からの思想形成過程において獲得し、『資本論』体系へと結実させた視角は、もちろん以上につきるものではない。

本稿での考察は、『経哲手稿』『ドイツ・イデオロギー』および『資本論』に限定せざるをえなかったが、『ドイツ・イデオロギー』以後『資本論』第1巻刊行までの20余年の間こそ、経済学形成途上におけるマルクスの真の苦闘の時代であったことを考えれば、この間

(42) *Ebenda*, S. 668. 前掲邦訳, 第11分冊, 116頁。

(43) *Ebenda*, S. 666. 前掲邦訳, 第11分冊, 111頁。

(44) *Ebenda*, Bd. 1, S. 803. 前掲邦訳, 第4分冊, 392頁。ドイツ語原文によって訳文を訂正。

に書かれた諸文献を詳細に検討することが必要である。にもかかわらず、本稿でのような考察を行なったのは、『経哲手稿』や『ドイツ・イデオロギー』こそ、マルクスの経済学形成を初発において方向づけるものであったと考えられるからである。事実、本稿で検討したように、これらの著作を通じて形成された視角は、マルクスの経済学において基底的な位置を占めるものとなっているのである。

筆者の今後の課題は、『ドイツ・イデオロギー』以後、1840年代においては『哲学の貧困』を中心とし、また1850年代においては『経済学批判要綱』を中心として、本稿での考察をあとづけていくことである。